

KSKS

No.124

23.4.28

ゆいゆい通信



編集人 社会福祉法人 寧楽ゆいの会
〒631-0823 奈良市西大寺国見町3-5-5
TEL/FAX 0742-41-6039
URL <http://narayuinokai.or.jp>

定価 1部50円
年間 300円

◆法人からの報告

「 中期計画始動します 」
理事長 庄野 千恵子 …1

◆Reports

◇自主防災組織との取り組み …2

◇ひまわり原点に立ち返って …3

◇ふぁ～ちえ居場所づくり …3

◆Reports

さわやぎ／歩っと地活 …4

きらく／ぽすと …5

こもれば生訓／こもればB型 …6

◆information

2023年度職員配置 …7

新人職員紹介 …8

編集部からお願い

寧楽ゆいの会 中期計画始動

新しい年度が始まりました。新型コロナウイルス感染症の法律上の位置づけが5月には2類から5類に変わり、季節性インフルエンザと同類になるようです。インフルエンザのようにどこの医療機関でも診てもらえて治療薬も処方してもらえたり、入院が必要ならすぐ入院できるのか不安はありますが…。今年3月にはマスク着用に関する国の方針も変わりましたが、当法人では、基本的にはこれまで通りの感染対策をとりつつ、マスク着用は場面により推奨することとしています。

さて、新年度から法人事業の中期計画を定め、各事業や活動について、今年の活動計画を作成して取り組むことにしました。組織運営に関する項目では、本部機能の整備や、職員評価制度の見直しなどに取り組んでいきます。

また、ワーキングチームを作り各事業の現状と課題をそれぞれの担当職員と共有してきています。これまで法人として大事にしてきたことを維持しながら、多様化する生活課題や相談内容に対して、各事業がどのように取り組んでいけるかを改めて検討する時期が来ていると考えています。

その他下記の内容で今後5年間を目処に取り組んでまいります。
(庄野千恵子)

I. 組織について

1. 法人理念、行動指針の見直し

近年の社会環境における事業や専門職としての行動指針とするものについて見直し、常に携帯でき、見える形にすることを検討

2. 部会活動

- (1) 研修: 法人研修、虐待防止研修、職員階層別研修の企画・実施等
- (2) 広報: 広報誌の編集発行、HPでの法人の事業や活動などの発信、精神保健福祉関連の講演会企画・運営などの啓発活動の実施等
- (3) 防災: BCP見直し、地域防災への参加、防災学習・避難訓練の企画・実施等

3. その他

- (1) 本部機能の検討: 会計、労務総務業務の整理等
- (2) 『あり組』: 等級表、人事考課制度運用の見直し等

II. 事業について

1. 各事業のあり方検討ワーキングチーム

各事業の現状、課題の分析、新たな事業のあり方、方向性について検討していく

2. 実態調査

寧楽ゆいの会利用者の生活実態調査の継続と、隔年実施のテーマ調査を実施する

Reports

防災を通して地域とつながりを

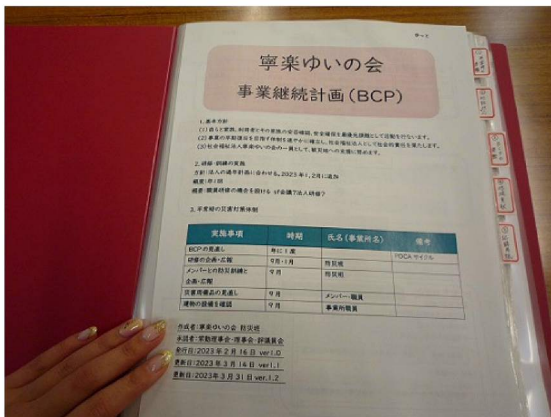
阪神・淡路大震災から28年が経ちました。それ以降も度々大地震が発生し、河川が大氾濫するような豪雨も毎年のように起きています。災害は人命を奪い、住宅や建造物等への被害は甚大なもので、ふだんの私たちの暮らしを一変させてしまいます。

災害時は日常生活の一部を担う福祉サービスも長期にわたり中断することになります。昨今の被災と復興の経験を活かし、いつどんな災害が起きても命と暮らしを守るためには、従来の消防・防災計画に加え、BCP(業務継続計画)、避難確保、地域貢献・連携を合わせた「福祉防災計画」が必要だと言われています。

▼計画作成を通して見えてきたもの

令和6年度から、介護施設や障害福祉サービス事業所でBCP策定が義務化されます。BCPとは「大規模災害や水害、感染症などの自然災害や大事故等不測の事態が発生しても、重要な事業を継続し、また中断しても可能な限り短期間で復旧させるための方針・計画」のことです。

▶ハザードマップや防災ハンドブックも入っています



ゆいの会では2021年度、防災計画の見直しを行ない、緊急時連絡カードの更新、災害時に備えた利用者や職員の連絡手段の確保、具体的な災害を想定した防災訓練を実施しました。2022年度はBCPについても検討を重ね、12月の法人研修で、日常業務の整理、災害時の初動対応やBCP発動時の動きについて確認をしました。災害時は利用者だけでなく職員の命と安全確保を最優先し、被害状況に合わせた行動を取っていきます。災害程度や被災状況の想定を議論していた時、「もし想定以上の災害が襲ってきたら、私たちは自分と目の前にいる人の命を守れるのか」と、とても不安になりました。BCPは実効性が必要です。だからこそ計画が実行できるようにふだんからの周知・研修・訓練が大切になります。一方で、防災はもっと身近なもので、大

災害について準備すると同時に、今取り組める防災についてもできることがたくさんあるのではないかと考えました。

▼「共助力」を高めるために

精神障がいがあることで避難所へ行くことをためらい、救助の声をあげられないことも考えられます。そんな時、声を掛けてくれる地域の人がいたらどれだけ安心でしょうか。

地域には自主防災組織があります。活動については地域によって様々ですが、それぞれ地域住民を巻き込んだ防災の取り組みを行なっています。BCPの中にも事業所の役割として地域貢献や連携をすることが求められています。防災を切り口に地域の人と顔の見える関係性を作ることは今できることの一つだと考えました。

実際に事業所のある地域の自主防災組織と社協の生活支援コーディネーターとつながる機会を設けました。それぞれの地域の防災組織や活動の様子、起こりうる災害の情報を聞き、事業所からもふだんの活動や取り組みと防災に対する不安などを伝えることができました。その後「自主防災の人と顔を合わせられて安心できた」「防災のつながりができたことで地域とつながるきっかけにもなった」と職員に聞きました。自主防災の人も「知っているだけで助け合うことができる」「事業所の存在は知っていたがつながりはなかった。事業所の方から声を掛けてもらい嬉しかった。一緒できることから始めましょう」と話してくれました。

東日本大震災では、津波によってあるグループホームの人は亡くなり、隣の工場の人は無事だったそうです。その二つがふだんから交流していたら何か違ったでしょうか。「ふだんから地域と連携することで災害時の安心・安全の価値が向上し、共助の力を強めることができる」と防災士から聞きました。

奈良県は過去に大災害が少なく、「大丈夫」と考えがちです。実際の被災を具体的に想定したり、自分の身に置き換えて考えたりするのはとても難しいことですが、「備えあって憂いなし」です。いつ起こるか分からない災害に備え、自助の力を高めるような仕組みや仕掛けだけでなく、皆で助かる共助力を高めるために、引き続きお互いの活動を通して地域とのつながりを強めていきたいと思えます。

(福田陽子)

Reports

ひまわり

活動原点に立ち返る

2022年度最後の「ひまわり」実行委員会が3月8日、ナラリーベースで開かれました。吉田病院とのオンライン交流会の振り返りと2023年度の具体的な活動内容について話し合いました。

入院者や医療従事者に地域の風を届けることを目的に、2022年度は病棟とのオンライン交流会やひまわり新聞の作成などを行ないました。コロナ禍で予定通りに動けない、限定された活動しかできない状況で、試行錯誤しながらの活動でした。

今の活動を継続すべきか考える中で、「一度原点を振り返る必要があるのでは」と意見が上がりました。そこで、改めて実行委員がひまわりの活動にどんな思いで参加しているのかを聞きました。「退



院への橋渡しができれば」「自分をみて『退院したらこんな生活ができるんだ』と思ってもらえたら」「一緒に楽しむこと

で、夢や希望を与えられたら」「交流会で地域での暮らしの良さを伝えたらお礼を言われ、自分も役に立てるかもしれないと思った」など、それぞれの活動への思いを確認し、「退院に向けて気持ちが動ききっかけになるような活動をしていきたい」と方向性を共有しました。

2023年度は、病棟で取ったアンケートに好意的な意見が多かったひまわり新聞を継続して発行します。オンライン交流会は、五条山病院での実施に向けて一緒に企画できないか、相談、検討していこうということになりました。

直接病院へ訪問できる日はまだ先になりそうですが、今できることを考えながら地域の風を送り続けていきたいと思います。(河部香澄)

昨年に引き続き、2月14日に吉田病院とのオンライン交流会を開催しました。コロナ感染状況から2度開催が延期になり、待ちに待った当日。イントロクイズや合唱などを楽しみました。終わりには、実行委員が手分けして購入してきたタオルや文房具などの景品が参加者全員の手に渡り、久しぶりの交流に笑顔があふれました。

▶ 毎回議論は白熱します

Reports

『くじらの会(仮)』

多様な人々がつながれる居場所づくり

NPO法人ふあ～ちえ(以下、ふあ～ちえ)はRestartなら(リスなら)と協働し、ひきこもりの人の居場所づくりを令和4年5月から始めています。「くじらの会(仮)」の名前の由来は、くじらの生態です。くじらは一定の周波で仲間とコミュニケーションを取りますが、仲間が届かない周波を出すくじらもいます。「ひきこもりの人の他には聞こえない周波(声)をキャッチできたら」と思いを込めました。

◆居心地よく自由に

奈良市社会福祉協議会が運営する『鳥見デイサービスセンターふらっと(奈良市三碓町)』の広々とした一室にはソファや漫画、ゲームなどが揃えられています。毎週火曜日の14時～16時、この場所を運営するのはふあ～ちえのメンバー。コーヒーを淹れる人や言葉掛けをする人、散歩に誘う人、横になっている人。一人ひとりが「自由に過ごせる居心地のいい空間」を意識し、利用者を温かく迎え入れます。

利用者は1日平均1～2人でひきこもりの自助会

「Break」や「リスなら」、奈良市基幹相談支援センターなどの紹介から利用につながっています。会話を楽しんだり、日々の生活や仕事の愚痴をこぼしたり、横になったりと思い思いに過ごしています。

◆1年間運営してみても…

ひきこもりや障がいの診断を受けていないなど、制度の狭間において、居場所を必要としても利用できないといった社会や地域の課題に取り組むため、ふあ～ちえの居場所づくりは始まりました。当初はひきこもりの人の利用を想定していましたが、いざ始めてみるとひきこもり経験者だけでなく、働いていたり、障がい福祉サービスを利用しているなど多種多様な人の利用があります。

スタッフの上原丈英さんは「場につながることで、ただそこに居ることに意味がある。ゆっくりできたり、自然とコミュニケーションが生まれたり、過ごせる場があることでその人の生活に広がりができる。そんな居場所を試行錯誤しつつ、これからも提供できたら」と話します。(宮崎涼真)